

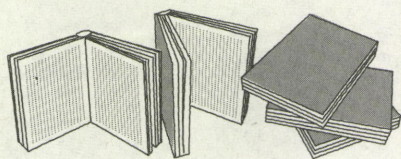
## うれしい保育者

立川多恵子

長年幼児教育を研究する立場にあった筆者は、しばしば「倉橋先生が現存していたら、この問題について、どう答えられるだろうか」と、考えてみることはありません。そこで今回は「いま、倉橋と出会う」という編集部の企画にのって、改めて倉橋惣三との出会いを楽しもうと思います。

選んだ本は『育ての心』。これは先生が東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）附属幼稚園の主事として勤務していた時代に出版したものです。著者が序文で述べているように、この本は先生自身が子どもや母親たちと接しながら、その実際と実践のままに即して書いた実感の書です。

共感しながら読み進めることができました。しかしその一文、一語について、立ち止まって、行間に広がる言葉の意味を考えてみると、奥行きの深さを感じます。『育ての心』は、編集にも工夫がこらされています。今回選んだ「まめやかさ」という文の前頁には「驚く心」と題した文が掲載されています。「おや、この子に、こんな力があつ、あの子に、そんな力が。驚く人であることに於て、教育者は詩人と同じだ」と。

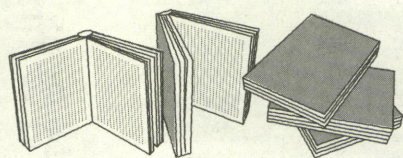


そこでまず「驚きながら教育する」ということは、どういうことか、具体的場面で考えてみることにしました。

A幼稚園を訪問した時のことです。ニワトリ小屋の前で「赤いの、赤いの」とつぶやいている子がいました。見ると、入園以来緘黙<sup>かえり</sup>で、みんなが心配していたS子が雄鶏を指しています。傍らにいた担任は、寄り添って「赤いの、赤いの」と繰り返し、しばらくS子と一緒にニワトリを見ていましたが、ほかの子の世話をするため立ち上がりました。話さない子どもが初めて言葉を発した。担任も驚いたでしょう。それでも担任は静かにその子に寄り添って、小さな声で「赤いの、赤いの」という共感の言葉を発しました。そしてほかの子のところへ……。

保育現場には複数の子どもがいて、保育者はその子たちの世話に追われるのが現実です。しかし、一人ひとりの子どもとの瞬間の出会いは大切です。具体的にどんなかわり方が適切かは、子どもの状態によって異なります。それを瞬間的に判断して動くことがうれしい保育者なのです。必ずしも模範的な対応が求められているわけではありません。外側から見て、失敗と思われるような働きかけでも、子どもと出会う機会になれば、大いに意味があります。その積み重ねが子どもを育てることにつながるからです。

保育現場で子どもとの出会いを生かして動く、それは子どもと、保育者の関係を深めるためにも、そして、子どもの安定感を保障するためにも重要なことです。筆者



は、そのことが一人ひとりの子どもを育てる「教育の核」になるのではないかと考えています。

保育者が驚きながら保育できることは、うれしいことです。しかしそのために立ち止まることができないことも多いのです。保育現場では驚きの感情をエネルギーに変えて、即、行動に移すことが必要になります。『育ての心』では、まめやかさの文の次ページに「こころもち」と題して、「子どもは心もちに生きている。その心もちを汲んでくれる人、その心もちに触れてくれる人だけが、子どもにとって、有り難い人、うれしい人である」と述べています。

教育者はいつも、子どもの気持ちに忠実に対応する努力が必要です。それが「まめやかさ」なのです。難しいことです。教育という仕事に教育者の自己変革が必要とされるのはそのためです。

『育ての心』の初版本は、昭和十一年に出版されています。再版されたのは、昭和二十二年であり、敗戦の年です。さすがの倉橋惣三も当時とは全く異なった国情の下に書かれたものであるとして、大分躊躇ちゅうちゅうしたようですが、編集者に勧められ、育つものへの久遠の信仰による光明の伝達にはかならないと考えて、子どもたちのためにと再版に踏み切りました。あれから六十五年経ちましたが、『育ての心』はこれからも語りつがれるでしょう。それは倉橋保育の根源に人間教育の原点をおさえた教育理論があるからです。

(元十文字学園女子短期大学教授)